

# 「不妊」におけるカウンセリングの多様性

—カウンセラーの経験と場に着目して—

東京大学大学院 李怡然

### 1 目的

2000年代以降、厚生労働省報告書や医学会ガイドライン等で「不妊」のカウンセリングの重要性が指摘され、任意団体によるカウンセラー養成と認定が進められてきた。不妊当事者側の語りに関する先行研究では、心理・社会的困難や医療者・不妊治療経験者とのコミュニケーションを望む声(倉本・河本・坪井ほか、2009)が報告されている。「不妊」は、当事者の価値観や生き方の変化によっては治療すべき「病い」ではなくなるという特性から、「医療」と「非医療」の両側面が交錯する曖昧な領域にあり、カウンセリングもそうした曖昧さの中で成立していると推測されるが、具体的な内容まで踏み込んだ研究の蓄積は少ない。本報告ではカウンセラーという支援者の観点から、当事者の抱える「葛藤」とカウンセリングの質的な差異に注目し、今後の不妊当事者への支援の可能性を考察する。

### 2 方法

本報告は、関東圏で不妊の相談にあたるカウンセラー6名を対象にしたインタビュー調査(2013年3月～11月)のデータに基づく。6名は異なる認定団体においてカウンセラー資格を取得しており、勤務形態(クリニック/独立/当事者団体)、不妊治療経験者か否か、性別の3つの条件を考慮して選定した。木下(2003)のM-GTAを参考に逐語録をコード化して概念を抽出し、カウンセリングの実践、カウンセラーの意識の2つの面について考察した。

### 3 結果

カウンセラーから語られたクライアントの相談内容およびカウンセリングのアプローチは上記の3つの条件によって特徴づけられる。クリニック勤務のBさんの場合は治療内容に即した相談が中心であり、診察で示されたホルモン値の受け止め方の感覚的な理解を促すなど、医師と患者の齟齬を埋める役割を自認していた。海外渡航による卵子提供を考える方を支援するAさんは自らエージェントを回って情報収集を行い、クライアント自身が情報を鵜呑みにせず「見極める力」を養ってもらいたいという。ピアであるCさん・Dさんはクライアントにとっては経験者ゆえの話しやすさがある反面、自分の体験を消化し感情をコントロールする難しさを挙げた。夫婦によるカップルカウンセリングを行うEさん・Fさんは、男女が家庭内ではぶつけられない本音を間接的に投影してもらうことで両者の対話を促進し、「本当に子どもが欲しいのか」という原点にまで遡って選択の再考を促していた。

### 4 結論

現在提供されている不妊カウンセリングは個別性・多様性に富んでおり、このようなバリエーションの豊かさは治療の開始・継続から「あきらめ」、子どもの出生後に至るまでライフコースの段階に応じた当事者の選択を可能にするのではないかと。ただし、相談内容や方向性がカウンセリングの場所やアクセスする段階によって規定されることで、むしろ多様な選択が狭められてしまう可能性もある。むしろ、今回インタビューしたカウンセラーたちは、中立的な立場を保つことの難しさも自覚していた。カウンセリングがクライアントのニーズを満たしているかどうかについては、今後当事者側への調査を行い、双方向から提供された知見を統合したい。

### 文献

木下康仁, 2003, 「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い」弘文堂。  
倉本愛季子・河本恵理・坪井陽子・大田まゆみ・宇多川文子, 2009, 「不妊治療中の患者が抱く思い」  
『山口大学医学部附属病院看護部研究論文集』84: 64-9.

謝辞 : 本報告をまとめるにあたり、ご指導頂いた東京大学医科学研究所武藤香織教授、吉田幸恵特任研究員に深謝致します。また、本報告は、東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業論文をもとに再構成したものです。東京大学人文社会系研究科白波瀬佐和子教授、本田洋准教授に厚くお礼申し上げます。